CLOSE UP

注目のヒト・モノ・コトをお伝えします

福島から世界へメッセージ

コットンベルトの実現でさらなる復興を目指す

2011年に起きた東日本大震災から被災地では復興が進んでいます。しかし、いまだにそれぞれの地域では、住民だからこそ感じる風評被害やコミュニティー問題が残されており、問題の解決が課題となっています。今回は復興に焦点をあて、福島県いわき市でコットン畑を運営し復興事業を行っている特定非営利活動法人ザ・ピープルにお話を伺いました。

東日本大震災から8年。ザ・ピープルが活動の拠点とするいわき市では、地震だけでなく原発の問題も抱え、いまだにさまざまな地域の課題があります。震災後、農家では、原発事故の影響から、野菜を作っても買ってもらえないという風評被害に悩まされ、農業をやめてしまう人たちも多くいました。また、周囲の町からいわき市に避難してきた被災者と地域住民との間で、それぞれの置かれた立場や、復興に対する思いなどの違いから、コミュニティーのつながりに亀裂が生じる危機にも陥りました。

そんな状況のなか、ザ・ピープル理事長の吉田恵美子さんは「誰も置き去りにしない世界」を実現するために、震災直後からボランティアセンターの運営など、さまざまな復興支援活動を行ってきました。その一環として、2012年から風評被害の払拭や避難者と地域住民とのコミュニティー問題の解決を目標に、有機農法で育てるコットン栽培事業を開始しました。コットンの栽培を選んだ理由は、塩害に強いというコットンがもつ特性以外にもあったと吉田さんは話します。「重要なのは、人が口に入れない作物ということです。また、コットンは放射性セシウムの移行係数が低く、獣害にも強い作物ということがわかったので、福島県だからこそできる、これまでとは違う農業の形が生み出せるのではないかと感じました」

畑は耕作放棄された場所やかつては学校田だった場所などを借りて耕し、コットン栽培の専門家から栽培方法を教わり、畑の土作りから始めました。現在、福島県内にはザ・ピープルが携わっているコットン畑が22か所広がっています。

コットン畑の運営には、震災前から行っている古着回収などの事業で培ってきた人脈が活かされ、5人ほどのスタッフが中心となり管理。いわき市だけでなく、双葉郡広野町など広大な範囲に存在する畑は、地域の人や県外から来るボランティアの力によって成り立っています。「ボランティアの参加を通して、福島県の現状を見てもらえる、農家さんの気持ちを分かってもらえることがこの事業のメリットです」と吉田さんは言います。また、地域住民や避難者が一緒に汗を流して農作業をすることで交流が生まれるのも大きなメリットです。収穫祭や、もの作りなどのイベントを開催し、コミュニティーの新たなつながりが構築されていきます。

18年10月には、いわき市にて「全国コットンサミット」が開催され、全国のコットン栽培に携わる人々が集まり情報交換をしました。「将来的には、世界に向けて情報発信をしていきたいです」とこれからの展望を話す吉田さん。実際にボランティアに参加してくれた東京の大学生が、ザ・ピープルの事業を見て感じたことを海外に発信する活動も動き出し、若い世代の影響力は風評被害の払拭に大きな力となっていると言います。

吉田さんはコットン栽培事業への思いを「自然の大切さと怖さを体感している福島県の人間だからこそ発信できるメッセージがあるはずです。がんばっている福島県を一緒に手助けしてくれる仲間を増やしたいです。県内に広がるコットンベルトを実現することで、地域のつながりが強くなると思います。そして、福島県から主体的に行動し、情報を発信していくような、復興の次のステップへ進みたいです」と語ります。今後、コットン畑がますます広がり、福島県の本当の復興につながっていくことを期待します。

特定非営利活動法人 **ザ・ピープル**

活動名

福島浜通りでの帰還を後押しコットンベルト実現化事業

福島県いわき市

https://npo-thepeople.com/

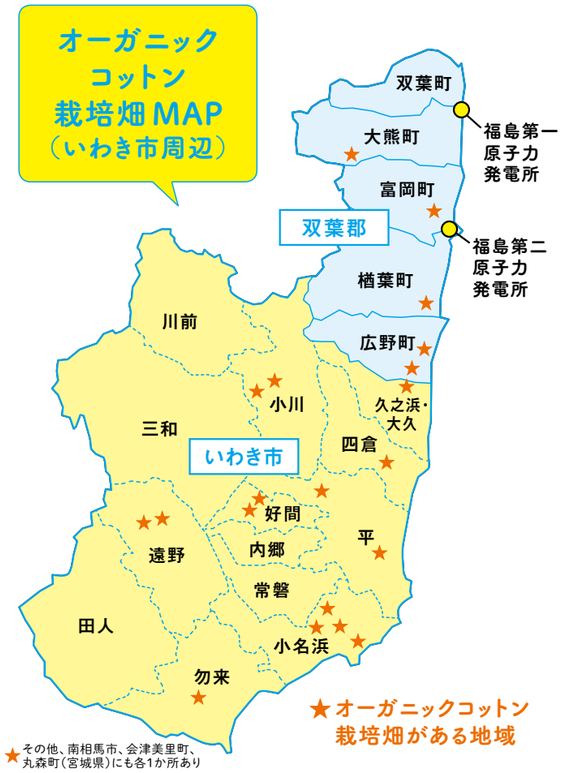
理事長

吉田 恵美子さん

ザ・ピープルは、福島県いわき市を拠点とし、「住民主体のまちづくり」をモットーにさまざまな支援事業を行っている団体。古着リサイクルなどの事業を行いながら、東日本大震災後からは、復興支援事業に注力し、オーガニックコットンの栽培・ものづくり事業やフードバンク事業を展開している。

在来種の茶綿を栽培。コットンには、ゴシポールという動物が苦手な成分が含まれており、獣害はほとんどない

スタッフは一からコットンのことを学び、工夫を重ねながら栽培している



収穫したコットンは手作りの人形を作ったり、紡績工場で糸にされ、タオルなどに加工される

コットンを手紡ぎした糸で作られるランプシェードはイルミネーションイベントで注目されている